

(本稿は未定稿のため、引用はご遠慮ください)

韓国の歴史論争とナショナリズムの克服

—「親日」の争点化と「ニューライト」の登場を中心に

河棕文(韓国ハンシン大学、日本近現代史)

はじめに

歴史は現在の韓国においてホットな争点の一つである。1990年代に入って日本軍「慰安婦」問題をきっかけに勃発した日本との歴史葛藤は、歴史教科書問題が加わってまさに「歴史戦争」と称されるまで高まった。韓国内では「過去事清算」を取り巻く歴史論争が政界をも巻き込んでダイナミックな展開を見せてきた。20世紀前半の朝鮮半島の歩みは、半世紀の空白を経て韓国社会を震撼させる議題と化したのである。そして、その過程において、保守側における歴史論争の新しい担い手として「ニューライト」が盛大に出帆した。

歴史論争の戦いがいわゆる「日帝時代」をめぐって行われているため、ナショナリズムとの関わりは自然と頭に浮かぶ⁽¹⁾。韓国においてナショナリズムの過去と現在をつなぐキーワードは「親日」と「反日」である。国内での過去事清算と結びつく「親日」の政治的・歴史的含意や、日本との歴史葛藤において持ち出される「反日」のスローガンがそれである。言い換えれば、植民地朝鮮を独立させるエネルギーとしてのナショナリズムと、現在の日韓関係をはじめ国際関係を律する一原理としてのナショナリズムは、時代の隔たりを超えて共存しているともいえる。

議論の中身をより具体的に言い表すと次の二つの事柄に絞られる。最初に、日本の歴史歪曲を糾弾する韓国側の声は、果たしてナショナリズムの克服に向けての認識と展望を持ち合わせているのかのことである。もう一つは、「親日」の整理を叫ぶ過去事清算は、「反日ナショナリズム」の政治的活用という底意を秘めているがため、「不純」であり中止されるべきであるとの見解をどう受け取るかになる。ここではニューライトの動向に注目して論旨を展開する。以上の諸論点を掘り下げてみるのが本稿の執筆動機であり終着点でもある。

1. 「親日」の争点化と過去事清算

1999年5月当時の金大中大統領は、大邱を訪問した際、「朴正熙記念館」の建立を支援すると述べた。大統領選挙の公約として出されてはいたが、「来年(2000年、引用者)の総選挙をにらんだ現政権の「慶尚道票の目当て」の方が本音に近かったであろう⁽²⁾。しかし、そういう政治的な目論見とかけ離れて、記念館建立の問題は朴正熙政権への歴史的評価と彼の親日経歴の方に飛び火していった。同8月、ある市民団体は「親日人名事典」の発刊のために大学教授1万人の署名を集めた。

一方、民主化の進展に伴い、「親日」問題はもはや韓国社会のタブーではなくなった。政治的には1997年の大統領選挙の際、ハンナラ党の候補・李会昌の父の親日疑惑が提起された。1998年8月にはソウル大学の美術学部のある教授が、創立早々の教授らの親日活動を批判したため、免職になったことが大きな波紋を呼んだ。さらに、朴正熙の長女・朴謹恵は、1997年の大統領選挙に乗じて政界に入り、翌年野党ハンナラ党の国会議員となった。

2002年に入って政界は「親日」の争点化に本格的に乗り出した。2月28日、議員連盟の「民族精気をたてる国会議員の会」(以下、「民族精気の会」)が「親日反民族行為者」として708人の名簿を発表したのはその皮切りであった。名簿の中には有力日刊紙・東亜日報と朝鮮日報の創業者であった金性洙と方應謨も含まれていた。朝鮮日報は既に保守の色合いを打ち立てていたが、「親日」の政治的争点化は東亜日報をも政府批判に与する決定的なきっかけと見なすべきである⁽³⁾。

2002年12月の大統領選挙は保守と対立し続けてきた盧武鉉の勝利と帰し、以来歴史論争はその強度や深さを増していった。2003年12月国会の「過去事真相究明特別委員会」は、「日帝下の親日反民族行為」などの過去事真相究明に関する4件の特別法を通過させた。とりわけ、親日真相究明に関する法律(以下、親日究明法)は、年を越して3月に国会を通過するまで、政界は勿論のこと、韓国全体を巻き込む論争を呼び起こした。

一方、2004年は政治的にも劇的な変化と反転の連続であった。3月には大統領弾劾という波乱が起こり、その反動をつかんだ与党・ウリ党は4月の総選挙で大勝を収めた。当たり前だが、そういう政治的な変化は歴史論争にも多大な影響を与えた。3月辛うじて国会を通過した親日究明法は、調査対象の時期と範囲が原案より縮小されたため、賛成派からも「無用論」が絶えなかった。7月、総選挙の勝利を背景に、与党は親日究

明法の改正案を提出し、12月与野党の激しい対立の末、劇的に国会を通過した。

2004年8月15日の「光復節」における盧大統領の祝辞は、攻勢に転じた政府と与党の変化を予告するものであった。就任当初の2003年には、「信じた同志までとてつもない武力と経済力に翻弄され、希望を捨てて日帝にへつらってしまった」と短く触れるに止まったが、1年後には一変して祝辞のほとんどを過去清算の力説に割愛した。「民族を裏切って植民統治をすすんで代弁した親日行為が相変わらず歴史の間に葬られ」、「親日した人たちが社会のリーダーになりすます」歪んだ歴史を正すべきという認識を打ち立てながら、「去る歴史において争点となった事柄を包括的に扱う真相究明特別委員会」の設置を提案したのがある。この祝辞はまさに歴史内戦の宣戦布告にほかならない。以後政界は「過去清算政局」と名づけられるほど、歴史をめぐる議論が盛んになった。

保守側の反撃は野党・ハンナラ党を先に立たせて10月の国会を舞台に行われた。ハンナラ党は最大手の金星出版社の『韓国近現代史』が「反米・親北的に偏向した記述をしている」と政府を攻めた。保守的な言論も積極的に加わったが、東亜日報の場合、「反米・親北・反企業的な考え方」のような「偏向したイデオロギーに基づく間違った歴史」記述であると、辛らつな論調で政府を攻撃した(4)。

2. ニューライトの登場

上述したように、歴史論争ないし過去清算をめぐる葛藤が高まるにつれて、保守側には新しい援軍が現れた。ほかでもなく「ニューライト」の登場である。

金星社の教科書と親日真相究明法の改正をめぐる熾烈な攻防が繰り広げられていた2004年11月23日、ニューライト・グループの一番乗りとして「自由主義連帯」が結成を宣言した。自由主義連帯はその創立宣言文の中で、「国民的叡智を集めて先進国の建設へとまい進しなければならないこの無限競争の時代において、盧武鉉政権は自虐史観を撒き散らし、支配勢力の交替と既存秩序の解体のための「過去との戦争」に自分の命運をかけている」と唱えている(5)。以後、現在の教科書の対案を示すために「教科書フォーラム」(2005年1月)を立ち上げ、「自由主義教育運動連合」(2005年7月)をもって学校の現場から自虐史観の一掃する運動を展開している。

2001年の扶桑社の歴史教科書問題以来、事実上死語であった自虐史観を韓国内の歴史論争に転用したのは、自由主義連帯の代表・申志鎬のアイディアと思われる。9月に東亜日報に連載した次のコラムが初出である。

私は、北朝鮮政権以外に、建国・産業化・民主化に至る大韓民国の歴史を、現政権ほど否定的に眺める国と政権を見たことがない。その点からすれば、現政権勢力は自虐史観の持ち主である。これで戦線は明確となった。大韓民国の歴史を愛する人々と、憎む人々との一大会戦、この国の運命はその結果次第である。(6)

歴史論争を政治の域に引き込む新しい通路を、自虐史観と親北というキャッチフレーズを通じて拡張したところにおいて画期的であり、ニューライト自身のいわば出師の表でもあった。

申が自虐史観を持ち出した背景には政略的な意図が見え隠れする。8ヶ月前のコラムでは、盧大統領は「実用主義者」であり、「親北左翼云々ながら現政府を非難することは、軍事独裁時代の卑劣なやり方」であると書いた(7)。しかし、北朝鮮の人権状況に「目をそらす」対北政策と「没体制的な統一至上主義」(8)とへの苛立ちは、彼の視座を「朴正熙」と「金日成」の二者択一へと狭めていき、韓国の状況は「反共守旧」と「親北守旧」によって分けられるに至ったのである(9)。そういう彼にとって大統領の祝辞は、上記した1月のコラムを自ら否定するほどの転機として受け止められた。「過去事真相究明をするなら、国民は386の過去についても正確に捉える」べきであると反攻に転じ、「金日成体制を信奉した「親北」が、「親日」を清算して「開発独裁」を断罪して大韓民国の歴史を立て直す」というのが過去事清算であると古びた反共の烙印を持ち出す(10)。

こうしてニューライトは、「韓国版」自虐史観との戦いを活動の枢軸に据えたが、この戦い方は保守側にとって新鮮なショックと感じられたようである。それ以後、自虐史観ということばは過去清算と盧武鉉政権を攻撃する伝家の宝刀として活用されていった。先述した金星社教科書に関する東亜日報の社説は、北朝鮮を批判しない「自虐史観」は健全ではないと罵っており(11)、朝鮮日報は翌年1月6日の社説で、今の韓国には「一言で自虐史観、汚辱史観、否定史観、不均衡史観のみが横行する」と書きた(12)。

ニューライトの登場と活動によって歴史論争は新しい様相を呈するようになった。まず、ニューライト・グループは保守系の言論の支援に支えられて、2005年以降いち早く、論争の主角として躍り出た。また、2004年までの歴史論争が主に親日ないし過去事清算の政治的意図をめぐる展開されたとするなら、ニューライトの

リーダー格のうち専門研究者が少なくないことから、論争が学界と結びついて行われる可能性もあった点を挙げられる。その具体的な実状に迫ってみよう。

3. ニューライトの歴史認識と国家主義

教科書フォーラムは2005年1月の創立記念シンポジウムにおいて、「韓国現代史60年を卑下して自虐する傾向」を憂い、「あらゆる理念的偏向や政派的利害も排撃し、ひたすら正確な史実と公正な史観のみを追求する」と明かした(13)。以後、6回のシンポジウムと数冊の単行本を出して自分たちの目指す歴史像を公開していったし、結局のところ中止に追い込まれたが、2006年11月の第6回シンポジウムでは、完成した歴史教科書の草案を発表する段階にまで至ったのである(14)。

彼らの目標は植民地近代化と正史としての「大韓民国史」の定立に向けての「思想闘争」に凝縮され(15)、その論理的な武器として脱民族主義と実証主義、そして「反北」を振りかざす。そして、歴史認識の基本的な枠組みは安秉直(ニューライト財団理事長)と李栄薫(教科書フォーラム共同代表)の作業に依拠して作り上げられた。

李は「自由主義的歴史認識」と「民族主義的歴史認識」を分け、既存の歴史教科書の誤りは民族主義にとらわれた「植民地収奪論」を土台にしたことによってもたらされたという(16)。自分たちの植民地近代化論とは、「日帝が朝鮮を植民地として支配した歴史の意義を、近代的な法と制度の移植を通じた朝鮮の近代化に求める学説」と定義づけられる(17)。日本は「詐欺と暴力で人民の財産を奪う」「野蛮な国家」ではなく、「朝鮮半島を永久に日本領土に編入しようと試み、それを目掛けて投資をした」「近代社会・近代国家」であり、そういう「植民地的収奪の結果として朝鮮の社会と経済も近代化し始め」たとまとめる。彼と弟子たちの行った実証的研究はこの説を裏付ける明白な証拠とされたのである。

植民地近代化論はもう一つの目論見とつながる。それは解放後の大韓民国の歴史的正統性を論証することである。つまり、南の方は「日帝から受け継いだ物的遺産は真に乏し」かったが、「日帝の残した別の歴史的遺産」としての「近代的な法・制度と市場経済体制」をよく保存して、「今日のように繁栄する市場経済を成立」させたとされる。しかし、北は社会主義革命を掲げて「悲劇的に文明の行き詰まりに入り込んでしま」い(18)、「日帝の建設した軍事工業は後に金日成が南侵を敢行する軍事力と化した事実」をもって「軍国主義日帝の本当の後継者」と決めつけられる(19)。

これと連携して分断と大韓民国の建国の意味合いは定義し直される。まず、解放直後において朝鮮半島には新しい国づくりに必要な「主体的な条件が備えられてお」らず、分断は「彼ら(米国とソ連、引用者)が選択した協力者によって 原理の異なる二つの国家が建設」されたと見るのが「常識的」と主張する(20)。分断の責任を米国と李承晩(初代大統領)に追い詰める歴史記述を狙い撃ちするものである。ついで、大韓民国が「『国民的な熱望』を抑えつけた一部の政治勢力によって無理やりに建てられた『南だけの単独政府』であったと教育され」る現実を是正するため、憲法を根拠にしながら「大韓民国は建国の基礎理念からしても近代国家」であったとされる(21)。

繰り返しになるが、以上の歴史叙述の目的は、究極には大韓民国正史の確立と国家主義の再定立に収斂する。「親北左派」の現政権の民族主義によって損なわれた、近代国民国家＝大韓民国の「歴史の建て直し」のため、顧みられなくなっていた古い国家主義の旗を持ち出したのである。要するに、国家主義は民主的な選挙によってつくられた盧武鉉政権の正統性を揺さぶる至高の価値規範として活用されている。

李栄薫は「大韓民国は誤って建てられた国という歴史認識の背景には、民族を至上の価値と見なす一種の原理主義的な間違った考え方が潜んでお」り、「国家の歴史に誇りを持つ健康な国民を教育することは、国家が国家として存立する限り、諦めてはいけない義務」であると強調する(22)。申志鎬にとって国家主義の色彩は次のところで表出される。「民族主義を捨てて世界主義と国際主義を唱える際、国家観と愛国の問題が争点とな」るがため、「民族主義のない愛国」、即ち「『共和主義的愛国』の概念が必要」になるという(23)。彼らの国家主義は「光復節」を「建国記念日」に置き換えるべきというところで絶頂を迎える。

「光復」という言葉は、1905年大韓帝国が滅びる以前に、何かしらの光明な光があったというわけであるが、実は平民や賤民の身分を持った人々に何の光がありましようや。従って真の光は、これらの下層身分が最終的に解放された1948年8月15日の大韓民国の建国と共に現れたといえます。本当に記念すべき国民的慶祝は、まさに大韓民国の建国にあてられなければなりません。(24)

以上のような経緯より成り立った大韓民国であるから、現政府の過去事清算は真っ向から否定される。李によると、「清算の対象とされる人たちの個人史をめぐるは々々を裁く」ところにとどまらず、「それ自体が将来韓国の現代文明を失敗に導く不吉な兆しと感じられるため」であると明かす(25)。既に確認したが、「韓国

の現代文明」とは1945年の解放ではなく1948年の大韓民国の建国により始まるため、大韓民国の正統性を崩す親日真相究明は中止されなければならない。

他方、大韓民国へのこだわりは、「安っぽい統一論」を主張する現政府＝「親北左派」の民族主義を罵倒することと連動する。「異なる体制を採る南と北を一つの国家に束ねるという発想は、「わが民族同士」という旗が揚がったら、すべての人々が自分の考え方と利害関係を捨てて、その旗の下に集まると錯覚する誤った前提の上に立っている」と言い切る。北朝鮮が市場経済体制を採択して私有財産制度と人権を尊重する「文明の社会」に転換する「文明史に基づく進化論的な統一」、即ち金正日政権の崩壊による吸収統一が李の統一論である。

4. 国家主義と民族主義の乖離

以上のような歴史認識と叙述は、ニューライトを支持する人たちに如何に受け止められたのか。結論から先にいうと、内部よりかなり反対の意見が提起されている。以下においてはシューライト・グループの主要な言説とその支持者との間の隔たりに注目し、ニューライトの謳える脱民族主義の正体を確かめてみたい。

もっとも波紋を呼んだのはやはり植民地近代化についての理解と評価のところであった。最初に、「大韓民国の発展の基盤は日本が朝鮮を合併して出来上がったのであり、国民さえ豊かになれば大韓民国がなくなって日本人として生きても構わない」という捉え方に流れてしまう(26)。つまり、「文明史的大転換」としての大韓民国建国の意義を明らかにするためには、植民地の時代においても「近代化」が進められた事実を証明することが欠かせない課題となるが、その肝心な論点は支持者すら受け入れに違和感を感じたのである。

「正直に言って落星台学派(安秉直教授とその弟子たち)の方々の上の主張は、頭では受け入れられても心にはすんなり入らないのです」という感覚が本音に近いと推察される(27)。だからこそ、「土地調査事業の我が文明史に寄与したところを敢えて賛美する必要もないが、事実を捻じ曲げて日本に対する憤怒と憎悪を煽る素材とされてはいけない」程度が大多数の見方であろう(28)。いっそのところ、以下の伝統的な反共主義の方が分かりやすいものである。

金正日(ママ)の同族侵略殺人戦争によって南韓は100%完全に灰と帰した状態となった。即ち、すべてが0であって、大韓民国はそこから出直した。

つまり、大韓民国は日本が近代化させたのではなく、革命家・朴正熙が率いて当時の国民たちが支持して従った誇らしい大韓民国であった。(29)

大韓民国の建国英雄は李承晩ではなく朴正熙とされる。言い換えれば、後ろめたい「親日」の痕跡を「反共」にすがって歴史認識の対象から外そうとする意識の発露であり、典型的な冷戦時代の歴史認識である。そこには朴正熙の時代に出没した国家主義と民族主義の癒着の余波も見え隠れする。

他方、ニューライト陣営の歴史認識が民族主義との正面衝突を押し切ったことから生じる政治的な得失に着目する反発も露呈する。これには二つの次元がある。

最初のものは次の文章に表れている。

盧武鉉政権の売国奴論争、親日論争にいくらうんざりしたといえ、売国奴、親日派がなかったことにはならない。彼らの公正性と不純な意図のために反対したのである。ところが、真っ向から売国奴、親日派を否定したいのか。盧武鉉のやったことだから。(30)

過去事清算を現政府が政治的に利用しているとの批判には同調するが、その批判は決して民族主義的な情緒と歴史観と相反するものではない。要するに、現政府が民族主義を政治的に活用していることを暴くには成功したが、民族主義自体の克服にまで導いていないのである。

もう一つは現実の政治に及ぼす影響を最優先すべきという指摘である。

次期の大統領選挙で左派が三度権力を採れば、先進国入りの手前で頓挫したアルゼンチンの二の舞となるに決まっている。これを防ぐのが我々の至急の課題である。ニューライトが日帝支配の肯定的な面について論じれば論じるほど、左派の再執権を助けることになる。ニューライト＝親日＝反民族という図式、真に誤りであり、ひいては危険である。(31)

これを書いたのは自由主義連帯の副代表である。既に述べたような親日の政治的側面に配慮した発言であったが、植民地時代の発展が大韓民国建国の主な原動力となったところを強調しながら船出したニューライト

にとってみれば、まさに自家撞着な課題のほかならない。

ちなみに、植民地近代化に賛成する支持者は安秉直と李栄薫の「客観的な研究」というアカデミックなところを浮き彫りにする(32)。しかし、それには以下のような反論が痛烈に突き刺さる。

李栄薫、安秉直教授を擁護するならば、姜禎求教授についてはどうしてむきになって批判、非難したのです。日帝時代における肯定的な面を見つめると学者としての立場となり、6.25(朝鮮戦争、引用者)が統一戦争だといえどもとんでもないやつになりますか。(33)

周知の通り、姜は2005年の末朝鮮戦争に関する研究と発言のため、保守陣営の集中砲火に遭い学校を免職させられた。

つまり、脱民族主義的な歴史観を具現する最大の論拠たる植民地近代化論は、未だに内部の批判勢力さえも納得させきいていないのである。案外その理由は単純であろう。大韓民国の建国を栄光の歴史に飾るために動員した国家主義が、却って支持者たちの「原初的」民族主義を刺激してしまったのである。

5. 日本軍「慰安婦」問題をめぐる議論

以上までニューライトの支持者の間には相変わらず民族主義のプリズムで植民地時代を見つめて評価する傾向が根強いことを確認したが、日本軍「慰安婦」問題をめぐる騒ぎはこれをよりぐつきり示している。やや大げさにいえば、ニューライト陣営の不協和音の震源地はそこにある。

簡単にこの経過に触れておこう。まず、李栄薫は2004年9月、あるTV討論会に出演したところ、「慰安婦を公娼といったとして、実際にはやったことのない発言」のためにあれこれと取りざたされた(34)。そして、2006年12月ニュース番組に出た安秉直は日本軍「慰安婦」の強制動員と土地収奪は証拠がないと主張した。

特に、安の発言以来ニューライトの支持者の間に日本軍「慰安婦」に関する論争が絶え間なく繰り広げられたが、全体の趣は植民地近代化の議論も災いして二人に著しく不利な形となっていた。二人を庇う意見は学問的な成果を優先すべきという注文にとどまり、「慰安婦問題はそういう発言のせいで被害を被るハルモニが少なくなく、国民感情からも到底認められないため、せめて政治的な次元からも止めてほしい」という批判は、穏便なほどであった(35)。

日本軍「慰安婦」問題は2007年に入っても熱い争点となった。米国のM. 本田議員が決議案を推進するというニュースに加えて、安倍晋三首相が「狭義の強制性」云々と発言したのがきっかけとなった。こういう国際的な状況の下で、強制動員の証拠はなかったとする安の発言は、やがて日本の右翼の主張および安倍の発言と重なって見えてしまう。その結論は以下のようである。

今日本ともっとも親しい米国において、日本人3世の議員さえも軍隊慰安婦が懸案であるとして慰安婦問題を提起している有利な状況においてすら、加害当事国の日本は一条乱れず事実の隠蔽を企てているに比べて、被害当事国の韓国は逆に自ら日本右翼の論理に陥る四分五裂の姿を見せているのがもどかしい。(36)

要するに、安と李を批判する側の方がもっと国際的な感覚と開かれた見方を持ち合わせているのである。

実際のところ、日本軍「慰安婦」の論点はニューライトの歴史認識が脱民族主義ないし国際主義を如何に体現しているのかを判断するよい材料になる。その意味からすれば、李の最近の著書は大いに示唆に富む(37)。

李はまず、挺身隊という用語が慰安婦と混用されるのを批判しながら自らの実証主義的な態度を見せびらかす。強制動員の方は、なかったという断定的ない方ではなく、「農村が貧しすぎて女性たちを押し出す力が強く、外から募集人の引き寄せる力も強かったので、官の方は無理に強制力を発動しなくてもいい状況であった」というふうに、迂回した叙述をしている。これより重点を置いているのは脱民族的な観点である。貧しさのために人身売買に追い込まれる女性と家庭(家父長)、朝鮮人業者を浮き彫りにすることによって、収奪論と日本軍「慰安婦」を結びつける民族主義的な心情を遮断する意図を露にする。

しかしながら、ニューライト陣営において、日本軍「慰安婦」問題についての真摯な取り組みはなかったといってもよからう。先に引いた著書で李は、朝鮮戦争時の慰安婦と世界的な現象としての「軍による女性の略取」とを交えて記述しながら、日本軍「慰安婦」問題を「今日我々の身近なところにまで深く浸透している現実」として受け止めているとするが、その中身と解決の展望は極めて漠然としている。なにより、2006年11月に発表する予定であった『韓国近現代史』教科書の試案には、日本軍「慰安婦」についての記述は入っておらず、安倍首相の発言に対しても公に触れたことはない。

そういう状況を参酌してのことか、ニューライトは2007年7月米国下院で日本軍「慰安婦」決議案が採択されると、自由主義連帯の名で素早く声明文を公表した。「日本政府は1970年西ドイツのブラント総理がユダヤ人虐殺について膝をついたように、心からの反省を今にでもしなければならぬ」という注文は如何にも「形式的」である。さらに、決議案が「韓日同盟の礎石として活かされることを望んでいる」との声明文の題名は「米国発の事必帰正」となっている。

6. 歴史論争とナショナリズム

2004年に至って過去事清算が立法化されてニューライトが船出することによって、韓国内での記憶の戦いをめぐる基本的な枠組みは整えられた。おりしもその過程は時期的に扶桑社の歴史教科書の争点化をはじめ、日本との歴史葛藤の深刻化と重なり合う。当然のことであるが、時間が経つにつれて内外の戦いは相互関連の程度を高めていった。以下においてはその関連の軌跡に注目しながら、学界を取り巻く歴史論争を中心に、ナショナリズムの克服は如何に認識・展望されていたかを探ってみよう。

『新しい歴史教科書』が話題になり始めた頃から、韓国では歴史教育と歴史教科書を自省する動きが本格化する。2001年3月に緊急に開かれた歴史学界の連合シンポジウムでは、韓国史研究の現状への反省と共に国定教科書のような歴史教育の国家主導を叱咤する声が噴出した⁽³⁸⁾。「国定廃止と検認定化」は既に歴史学界内の常識として考えられていた。扶桑社の歴史教科書問題が顕在化する初期段階において、韓国社会の内部では「自己相対化」ないし「普遍性」への自覚と模索をも試みられていたのである。

その具体的な様子は以下のように二つの流れとして現れた。「脱近代論」(あるいは「脱民族論」)に立脚して韓国史教育と教科書を批判し、東アジア共通の歴史認識を目指した活動などである。

まず、2002年4月には、日本の歴史教科書のみを問題視する「偏狭な民族主義の危険性」を警告する月刊誌『当代批評』の特別号の諸論文が公開された。「記憶と歴史の闘争」という企画で掲載された3本の論文は、刊行と同時に注目を浴びた。池秀傑は「民族と近代の二重奏」において国家主義的で自民族中心主義的な韓国近現代史の研究姿勢を指摘し、「抑圧された主体と盲目の権力」という尹海東の論文は国史教科書の国定を廃して自由発行制の導入を促した。林志弦は、「韓国の国定教科書と日本の新しい歴史教科書は、各々の民族的アイデンティティを強調して激しく衝突するが、認識論的次元においては民族主義という同じ土に根ざしている」と主張した。

また、日本との歴史葛藤に直に対応したグループからも、韓国の状況を憂慮する指摘がなされた。たとえば金聖甫によると、韓国は日本の教科書歪曲を危険視するが、韓国の教科書が日本の教科書一般よりも、一国主義的で民族中心的で冷戦的な見方をしているとされた⁽³⁹⁾。彼らの基本的な問題意識は、日本だけでなく東アジア各国が自国の教科書の歴史認識を批判的に検討・克服することによって、ナショナリズムへの「理論的批判」の次元を超えて、東アジアにおける共通の歴史認識の形成を模索するところにあるという。2005年に日中韓3国の研究者・教師・活動家によって出された『未来を開く歴史』は、その努力の中間報告書に当たるとされる。

これとは別に、「親日」をはじめ過去事清算の立法化への異議申し立ても現れた。2002年8月、ドイツ史研究者の安秉稷は、ドイツ学界におけるナチ時代の日常史研究を紹介しながら、過去事清算のやり方は「親日」の歴史的状況と脈略を度外視したものであるという主張を張った⁽⁴⁰⁾。安は「日帝期の植民体制に対する順応と協力行為は社会全般にわたって広範囲に現れた現象」といい、「本当の過去清算への道は「居合わせない幸運の持ち主」が一方向的に裁くのではなく、一緒に不幸な体験の当事者となって省察し、克服に向かって努力すること」と結論づけた⁽⁴¹⁾。

以上のような安の立論は、彼の学問的な営みとは異なり、ニューライトの「伝令」東亜日報の頻繁な報道⁽⁴²⁾と共に、ニューライト・グループの方に接近するようになる。「虐殺・人権蹂躪など反人道的な行為ではなく、祖国と民族という特定の価値に反する附逆行為を清算の対象とする親日清算に、大義名分があるかは疑問」という彼の主張は、2006年2月ニューライトの主催したある討論会で行われた⁽⁴³⁾。

一方、脱近代論の方は着実に研究を重ねていくが、とりわけ『植民地近代の視座』(岩波書店、2004年)の刊行はその中間決算ともいえよう。そこには一先ず民族と近代への物言いというテーゼに共感する韓国研究者のほとんどが網羅されている。しかし、発刊後にも増幅した内外の歴史葛藤によって、彼らは多様に分派していったが、その点を本稿は注目したい。

まず、ニューライトと連携しながら、そのアカデミックな外延を担う『解放前後史の再認識』(以下、『再認識』)の刊行を主導する動きが挙げられるが、李榮薫と朴枝香が代表的である。ところが、『再認識』の代表編集者でもある二人は、実は近代の受け止め方をめぐって全く相反する。そのため、ニューライトと脱近代論の「異種結合」と喩えられもしたが、その結合の接着剤は「脱民族」、具体的には親日・植民地・独裁へと連なる過去事清算に対する嫌悪感であった⁽⁴⁴⁾。その結果、『再認識』のグループは過去事清算に付きまとう「歴史

の政治化」に傾倒し過ぎてしまい、学問的な切磋琢磨の余地を自ら封鎖することとなった。現政権に向かって「民族至上主義＝統一優先という偏狭でバランスを欠いた」と責めることの正当性はさて置いても、「植民地時代に作られた視線でいまお互いを見てはいないか」という診断は、韓国の現実とはかけ離れた古いバージョンである(日本も同じであろう)(45)。

他方、脱近代論への取り組みを一層強化したグループもあるが、これは二手に分かれる。一つは植民地と解放以後の歴史を総じて論じながら、多元化した韓国社会は「近代」と「民族」を廃棄すべきと唱える。彼らは既存の民族主義は勿論のこと、『再認識』についても「保守右翼」の政治的利害に服務しながら時代錯誤的な左右対立に便乗していると、別れを告げる(46)。

脱近代論のもう一方は理論的な完成度を高めることに専念する傍ら、日韓の歴史葛藤にも視線を送り続けている。韓国のナショナリズムは支配イデオロギーで権力そのものであるという認識に立つ林志弦は、韓国と日本のナショナリズムは「相互を補強・補完する関係にある」と決めつけている。したがって、政治に振り回されも利用されもしない「共通の認識基盤の形成」のためには、「東アジアがどのように近代を迎えたのか」という大きな問題を設定し、先導した日本と、日本と深く関係しながら近代を迎えた韓国や中国、台湾の歴史を描き直す」ことが必要であると力説する(47)。

しかしながら、林の試みは現在の歴史論争に対する意義ある批判にはなりえても、韓国の現在を変える具体的な方策の案出にまでにはつながらない。これは過去事清算に関する見解からも確かめられる。彼は記憶の内戦の真っ最中であった2004年の状況に向かって、「植民地あるいは独裁の過去を壮絶に凝視し克服する努力が人的・法的清算に縮小されるか還元されては困る」との主張を裏付けるため、第一義的に「自分の行為に対する非意識や個人的な責任感を全く覚えな」い現実を放置する「司法的なディスコース」の限界に着目する(48)。

こういふ林の見解への反論は二通り出された。一つは現実になされている過去事清算の努力を等閑視するという指摘と共に「植民地近代化論」への共鳴を問いつめる指摘である(49)。もう一つは林の「省察的過去清算」と「制度的過去清算」とは対立的ではなく、「制度的過去清算が「公的記憶の民主化」を伴うが、「記憶の国家化」の持つジレンマをも抱え込んでしまう点を見逃してはならないという主張である(50)。ニュアンスの差はあるが、林の作業が現実的にも理論的にもどういふ展望と対案を持っているかを問い返す点において、二人は一致する

おわりに

以上まで韓国における過去事清算と歴史論争をニューライトの台頭とナショナリズムに関する議論を中心に概観してみた。「親日」と「反日」とは、20世紀前半の植民地朝鮮を形象化するキーワードであると同時に、解放後の南北を通底する歴史的な実在として影響を及ぼしてきたものである。最近に至ってその波長は、日本との歴史葛藤を媒介に民族と国境をまたがるようになり、ニューライトの登場とあいまってその話題性と政争としての意味合いを一層浮き彫りにしてきた。

最初の問いに戻ろう。ナショナリズムの克服という地球的な課題を思い起こす際、果たして韓国で繰り広げられている歴史論争の行方はどちらに向かっているのか。既に確認したが、この問いかけに向き合うべき実践的・学問的な営みは未だに現在進行形である。ただ、以下の事項は我々が見つけ出した重要なベースキャンプであろう。

一つ、脱近代・脱民族と近代・民族とを互いに対立的で排他的なものとして見なさず、現在を「過渡期」と設定し直して「共存」を模索することである(51)。1948年の大韓民国は「親日」と「反日」との対決を冷戦によって置き換えることによって建国されたのであり、そういう不完全な近代国民国家の現出であったことから、「親日」と「反日」は国家主義と民族主義の狭間で歪んだ噴出を繰り返さざるを得なかった。1980年代以降の民主化と日本との歴史葛藤を経ながら、初めて韓国社会はその歪んだ現実を直視し、ナショナリズムの克服という課題を自覚したのである。本論を振り返ると、「記憶の民主化」と「記憶の国家化」の錯綜である。

二つ、このように混沌した現実の下では、そういう状況への批判的な省察・認識と共に、実質的な解決を担う展望や対案の創出とが伴わなければならない。言い換えれば、多元化した現実を綺麗に理論的に整理しようとする取り組みは、実践的に現実と関わる動きとの「共闘」を念頭に置くべきということになる。これを東アジアにおける共通の歴史認識の形成が可能なのかを問う試みに当てはめると、以下ようになる。共通の歴史認識づくりの難しさを確かめるのは容易であるが、どこまでが可能なのかを見極める作業こそ、未来志向的な共同体の形成には欠かせない営みである。

注

- (1) 前もってナショナリズムについて簡単な定義づけが必要となろう。本稿はナショナリズムを国家主義と民族主義とを総称する概念と理解するところから出発しており、国家主義と民族主義の癒着と分離こそ、韓国現代史を貫通する思想的な脈絡の一つと考えている。
- (2) 「元大統領たちがのさばる理由？」『東亜日報』1999年5月19日。
- (3) とりわけ2001年初めからいわゆる「言論改革」をもって政府と確執していた東亜日報の変化については、拙稿「反日民族主義とニューライト」『歴史批評』2007年春号、歴史批評社を参照されたい。
- (4) 「偏向した歴史教科書で未来はない」、『東亜日報』2004年10月5日。二日後の社説にも「自由民主主義を追求する我が体制の正当性を悟らせるのは未来の民主市民を養うに重要である。これは政争の対象にならない」と念を押している（「歴史教科書、冷徹に再検討すべき」、『東亜日報』2002年10月7日）。
- (5) 自由主義連帯のホームページ(www.486.or.kr)に前文が載せられている。ニューライト・グループの全体的な様子は、丁海龜の論文「ニューライト運動の現実認識に関する批判的検討」（『歴史批評』2006年秋号）が参考となる。
- (6) 「執権勢力の「自虐史観」、問題あり」『東亜日報』2004年9月15日。
- (7) 「新しい保守が出なければならない」『東亜日報』2004年1月21日。
- (8) 「対北政策「自我分裂」克服せねば」『東亜日報』2004年5月12日。
- (9) 「金日成よりも朴正熙が嫌い？」『東亜日報』2004年6月9日。金日成を選択した側を彼は「片目の歴史認識勢力」と呼んでいる。
- (10) 「386、過去清算の資格なし」『東亜日報』2004年8月18日。「主思派を親北左翼とするのは（「赤狩り」ではなく、引用者）単純な事実の確認」としている。
- (11) 前掲社説「歴史教科書、冷徹に再検討すべき」。
- (12) 「均衡と肯定の大韓民国史の復元を」『朝鮮日報』2005年1月7日。
- (13) 教科書フォーラムのホームページ(www.textforum.net)。そして、教科書フォーラムの行った作業の主な経過と内容は、辛珠柏の論文「教科書フォーラムの歴史認識への批判—『韓国近現代史』教科書批判に対する反論」（『歴史批評』2006年秋号）が参考となる。
- (14) 単行本のうち、2冊からなる『解放前後史の再認識』（チェクセサン、2006年）が体系的と評価される。なお、第6回シンポジウムの経過と反響については、前掲拙稿「反日民族主義とニューライト」を参照されたい。
- (15) 申志鎬は「守旧左派との思想戦より収めた成果」として、「執権民主化勢力の自虐史観の批判と大韓民国史の復元」に着手したこと、大韓民国の「内在的発展、侵略と抵抗、対米自主と民族共助」を実証的研究をもって批判したと述べている（「ニューライト運動の展開と思想的特質」『時代精神』2006年秋号）。
- (16) 2006年6月、EBSラジオで行われた李栄薫の「特別講義 解放前後史の再認識」の11回「民族主義史学」より「自由主義史学」へ」の一部であり、以下においては回数と題名のみを記す。全講義はニューライト・グループのウェブ・サイト(http://www.newright.or.kr/sub3_list.php?catald=nr03007)に収められている。これを加筆・修正して刊行したのが『大韓民国物語』（ギパラン、2007年）である。
- (17) 3回「植民地収奪論vs植民地近代化論」。以下断らない限り、同じである。
- (18) 4回「日帝がこの地に残した遺産」。
- (19) 8回「だれが戦争を引き起こしたか」。
- (20) 6回「南北分断の原因と責任」。
- (21) 7回「建国の文明史的意義」。これと共に、李承晩については、「彼を抜きにしては大韓民国の出発を説明できないほど、国づくりに至大な功績を残した人物」として評価されるべきと主張する（9回「李承晩大統領を正しく知る」）。
- (22) 2回「民族主義の落とし穴から抜け出よ」。李は「大韓民国の理念を理解し、それを自分の利害とつなげて大韓民国を内面より尊重する」「国民づくり」を自任する（「韓国社会の先進化への方案」『時代精神』2007年春号）。
- (23) 前掲対談「韓国社会の先進化への方案」。
- (24) 前掲7回「建国の文明史的意義」。この部分は『大韓民国物語』には省かれている。
- (25) 前掲11回「民族主義史学」より「自由主義史学」へ」。以下断らない限り、同じである。
- (26) 「李栄薫教授を批判する。」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=34493)。

- (27)「劣等意識」と「優越感」
(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=34768)へのレス。
- (28)「私も小説アリランと作家を批判する。」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=34463)。
- (29)「教科書フォーラム事態についての我々の立場」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=21289)へのレス。引用は原文のままであり、以下同じである。
- (30)「ストックホルム・シンドロームに悩まされるニューライト」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=22516)。
- (31)「親日論争、未来を見よう」
(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=22570)。
- (32)「客観的研究の意図まで見下す必要はありません。」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=22523)。
- (33)「私は学者、お前はアカ?」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=34832)。
- (34)前掲書『大韓民国物語』、165ページ。李栄薫の発言を報道した「オマイニュース」の記事は、「挺身隊は韓国人の業主が管理…朝鮮総督府の強制動員、誰が主張する」(http://www.ohmynews.com/nws_web/view/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0000207687)。
- (35)前掲「李栄薫教授を批判する。」。
- (36)「安倍の妄言、我々に批判できますか?」(http://www.newpol.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=util_bbs1&num=29459)。
- (37)以下の内容は、断らない限り、前掲書『大韓民国物語』、111-166ページを参照した。前述した『解放前後史の再認識』には日本軍「慰安婦」について2本の論文が収められているが、管見の限り、執筆者たちはニューライトの活動とかかわっていない。
- (38)『歴史批評』2001年秋号の企画・「韓国歴史学、歴史教育の争点」と、同2002年春号の「脱/国家脱/民族の歴史叙述について聴く」とに載せられた論文もいい参考となる。
- (39)金聖甫「韓国と日本の教科書における現代史叙述の比較」『和解と反省を目指す東アジアの歴史認識』歴史批評社、2002年。
- (40)2002年8月に開かれた国際歴史学大会で発表した論文「過去清算と歴史叙述」。それに対する反論が韓国史とドイツ史の方から提起され、新聞に掲載された。朴賛勝「親日派清算」論争—安秉稷教授を批判する『ハンギョレ新聞』2002年8月31日。李晋模「親日派清算」論争—安秉稷教授を批判する／「過去清算」ドイツとの比較は危険『ハンギョレ新聞』2002年9月14日。
- (41)安秉稷「過去清算と歴史叙述—ドイツと韓国の比較(付記:批判に答える)」『歴史学報』第177集、2003年。
- (42)2002年8月7日、2003年5月2日と6月12日など、3回採り上げられている。
- (43)「政府の過去事清算、何が問題なのか…市民団体の討論会」『東亜日報』2006年2月14日。
- (44)林大植「巻頭言」『歴史批評』2006年春号。
- (45)「連続インタビュー歴史認識 韓国編③ 朴枝香さん」『朝日新聞』2006年5月11日。
- (46)「巻頭言：韓国近代認識の新しいパラダイムのために」『近代を読み直す 1』歴史批評社、2006年。なお、これに関する論考としては、朴泰均の「ニューライトの登場と歴史認識論争」『黄海文化』56号(2007年秋号)もいい参考になる。
- (47)「連続インタビュー歴史認識 韓国編① 林志弦さん」『朝日新聞』2006年5月10日。このような補完関係は「敵対的な共犯関係」であり、日韓の間の歴史問題が起きると、「日本の左派と韓国のナショナリストたちが共闘する」とされる(「連続インタビュー歴史認識 韓国編③ 朴煥斌さん」『朝日新聞』2006年5月15日)。
- (48)林志弦「なぜ近代的価値を手放せないのか 論争: 曹喜ヨン、朴泰均、李炳天の批判に答える」『教授新聞』2005年4月26日。
- (49)李炳天「批評: 林志弦教授の「大衆独裁論」を批判する」『教授新聞』2005年3月30日。
- (50)曹喜ヨン「脱構造的批評では複雑な現実の解明はできぬ 論争: 林志弦(教授新聞353号)についての再反論」『教授新聞』2005年5月7日。
- (51)これに関しては、金聖甫の論文「葛藤と不信の時代に南北現代史を読み直す」(『創作と批評』2007年春号)がいい参考になる。